

マタイによる福音書 28:1-10

「復活の主イエス・キリスト」

2026年4月5日(イースター)

藤沢北教会牧師 長倉基

(おはようございます。イースターおめでとうございます。)

天気が良く、とても明るい朝を迎えることができました。「おはよう」これが復活なされたイエス様がなされた挨拶です。朝の挨拶ですね。イエス様は日曜日の朝にお墓にきた二人のマリアに「おはよう」と挨拶をなさいました。たしかに朝でした。けれどもそれだけではありません。イエス様は復活なされたのです。イエス様の復活そのものが新しい朝です。光あふれるまぶしい朝です。イエス様は新しい命に生きておられます。そしてイエス様はこの命をわたしたちにもくださいます。イエス様はわたしたちを復活の命の中へと招いてくださっています。

みなさんは今朝起きて、「おはよう」という前、夜の間は寝ていましたね。イエス様も2日のあいだ真っ暗なお墓の中におられました。小さい洞窟のような形をしたお墓の入口は大きな石で閉じられていて、誰も開けることはできませんでした。イエス様はそこで眠っておられたのではありません。死んでしまわれたのです。2日前、イエス様は十字架につけられました。人間のあらゆる悪い思いを背負って十字架につけられたのです。自分さえよければいい、ほかの人などどうなってもいい、嫌いな人なんていなくなればいいんだというわたしたちの悲しい心を背負ってイエス様は十字架につけられました。神さまなんて何の役にもたたないじゃないか、神さまなんていらぬ、というわたしたちのさびしい心を背負ってイエス様は十字架につけられたのです。そして十字架で死んでしまわれたイエス様はお墓に収められました。お墓の中はまっくらです。イエス様は死んでしまって真っ暗な闇の中に置かれていました。

イエス様がお墓に収められたところを、マグダラのマリアともう一人のマリア、二人のマリアが見ていました。イエス様が死んでしまわれた。最後まで見届けようと思ったのです。そして、イエス様のご遺体を大事にしたいとも思っていました。でも、その時その時間にご遺体に薬を塗ったり、いい匂いの油を注いだりすることはやってはいけない日でしたので死んでしまったイエス様に、何もできませんでした。お墓の中も、二人のマリアの目の前も真っ暗でした。真っ暗闇の中ではわたしたちは何もできません。わたしたちはどうしたらいいかわからない時があります。家族や友達を失った時、どうすればいいかわからなくなります。ひどい目にあったとき、目の前が真っ暗になります。腹が立ってしかたがないとき自分のことが見えなくなります。重い石がどっしりと前を塞いでいて真っ暗闇です。

二人は、もう一度お墓にでかけました。次の日にはご遺体に油をぬったりすることができからです。朝でした。でも心は暗いままでした。明るく「おはよう」なんてとても言

えない朝でした。ところが、お墓につくと、たいへんなことが起こりました。地面がグラグラと揺れて、まぶしい光と共に天使が降りてきたのです。そして、あの重いはずの石を、ごろんと転がしてお墓の入口を開けました。そしてその石の上に座ったのです。

「怖がらなくても大丈夫。イエス様はここにはいらっしゃいません。以前お話しになったように、復活なされたのです！」

二人のマリアは、何がなんだかわかりませんでした。心の中は「怖い！」という思いと「イエス様が生きておられる？嬉しい！」という思いがまぜこぜになっていました。そこに天使は言いました。「ごらんささい、遺体はもうありません。急いで家に戻ってみんなにこのことを伝えなさい。『イエス様は死から復活されました。ガリラヤに先に行っておられるから、みんなはそこで会えますよ』」。

二人は、この不思議なできごとと天使の言葉をみんなに伝えようと、走り出しました。ところが、しばらく走ったところでイエス様が立っておられるのが見えました。イエス様は二人におっしゃいました。「おはよう」。この「おはよう」は、ただの朝の挨拶ではありません。前の晩まで、イエス様は死という真っ暗な闇の中におられました。誰にも動かすことができない大きな石に閉じ込められていました。けれども、神様はその石をどかし、死を打ち破って、イエス様に命をお与えになりました。新しい朝、命の朝を与えてくださったのです。「おはよう」という挨拶は喜びの挨拶です。イエス様は二人に「喜びなさい」と挨拶なされたのです。「喜びなさい。新しい朝だよ。」けれども、一番喜んでおられるのはイエス様だったに違いありません。イエス様が2日前に経験なされた十字架はイエス様にとって、たいへんなことでした。十字架の上でイエス様は「わたしのお父さん、なぜわたしをお見捨てになるのですか」と叫ばなければならぬほどでした。イエス様はご自分ではあの大きな石を動かすことはできなかつたのです。けれども、人間の罪がつまったあの重い石を神さまはとりのぞいてくださりませんでした。イエス様は父なる神さまの御心としてあの石で死に閉じ込められてしまいました。イエス様が罪を背負って十字架で死なれることが、神さまのご計画だったのです。けれども、この朝、真っ暗やみに置かれたイエス様を、神さまは起き上がらせ、闇から光へとお連れになりました。あの暗闇に光をさしてくださいました。誰にも動かせない重い石を取りのけてくださったのです。この神様の死に打ち勝つ力によって、誰よりも確かな喜びを与えられ、慰めを与えられたのは、主イエスご自身であったはずでず。そのイエス様の「おはよう」、「喜びなさい」という挨拶は「わたしは喜んでいる」という神さまへの信頼の挨拶だと思うのです。

そして、何よりイエス様が喜ばれたのは、ご自分が死んだのに復活したということにもまして、この二人のマリア、家にいる弟子たち、そしてすべての人が今、命をお作りになる神さまを知り、新しい命に生きることができるようになったからにちがひありません。イエス様を復活させられたこの神さまの御業は、ほかのどんなものよりもわたしたちの慰めと力です。わたしたちの教会は、このイエス様を復活さされた神さまの御業によって立っています。

イエス様に出会った二人は、イエス様の足に抱きつき、ひれ伏しました。イエス様を礼拝したのです。この二人の姿がわたしたちの礼拝する姿になりました。日曜日の朝、光の中復活のイエス様が迎えてくださるその足元にひれ伏して礼拝をする。これがわたしたちがささげている礼拝です。イエス様の復活は、よくわからないと思うかもしれないし、こわいと思うかもしれませんが。ここにいるずっと礼拝をしている人もときどきわからなくなることがあります。時に怖いことでもあるかもしれませんが。けれどもこうして礼拝をし、御言葉を聞いたたびに、イエス様は復活して生きておられる、となんとでもおもうことができます。二人のマリアは怖いと思いつつも喜んだのです。イエス様は、死んだままではなくて、今生きておられるのですから、嬉しいことです。わたしたちも、神様の最も大きな御業、イエス様のご復活を恐れながらも喜ぶ礼拝をおささげしています。

今日は2026年度の最初の日曜日でもあります。今年度の最初の礼拝がイースターの礼拝になりました。新しい学校、新しい学年になる人がいると思います。学校を卒業して新しい生活を始める人がいるかもしれません。新しい仕事を始める人もいるでしょう。あるいは、新しい年度になっても生活は何も変わらない、という人もいるかもしれません。どんな生活をしていても、ひょっとすると辛いこと、大変なことがあるかもしれないけれど、神さまはわたしたちに命を与えてくださる神さまです。復活したイエス様が、わたしたちに生きるための命をくださり、どんな困難でも、どんな重い石にぶちあたっても、必ず乗り越えさせてくださいます。

今日はイースターの特別な礼拝です。けれども、もともと、わたしたちキリスト教会が日曜日の朝に礼拝をしているのは、主イエスが復活なさったのが日曜日の朝だったからです。ですから、今私たちがしているイースターの礼拝と他の52回の礼拝には何の違いもありません。わたしたちは毎週イースターの礼拝をしています。日曜日、主の日の朝の礼拝のたびに、イエス様が迎えてくださいます。「おはよう」、「喜びなさい」、「わたしは嬉しい」と。これからも、みんなで喜びの礼拝、イエス様がよろこんでくださる礼拝をささげながら一緒に歩みましょう。